
神様の子供

宮森琥珀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

神様の子供

【Nコード】

N6289A

【作者名】

宮森琥珀

【あらすじ】

高校生の紫村大地の親友・真砂が末期ガンを患い、ホスピスに入った。死に行く友に何が出来るかと考える大地は、とある行動を起こすのだが……。限られた時間の中での少年達の友愛をテーマにした切ない小説です。

1：初雪

はらはらと初雪が降る、十月の夕刻。舞い落ちては融けてゆく儂い雪にも、白い視界の向こうでほんのりと染まる朱の空にも、じつくりと目を向ける余裕は俺には無かった。もう少しで目的地に着く。急がなければいけないようで、まだ行きたくないという思いもある。それは結果として普段どおりの歩行速度を俺にもたらししていた。

俺は高校生だ。あいつだって、まだ高校生だ。普通だったら、まだ人生の半分も生きてない年のはずなんだ。それなのに……。

俺は今、ホスピスへ向かっている。

親愛なる親友に面会するために。

そのホスピス棟は、一見するとアンティーク調のホテルにしか見えない。それほど設備も充実しており、清潔で快適な場所だった。あちらこちらに置かれている観葉植物も、余りホスピスだと感じさせない健康的な空気をもたらししている。スタッフの丁寧な案内を受け、俺はすぐに親友の部屋に辿り着くことが出来た。梅田真砂。(うめだ まさご) そう名札のかかった扉に、何とも言えない感情が胸に沸いた。しばし逡巡した後、意を決してノックする。返事がない。眠っているだけだろうか……それとも。そうつとドアを開けると、窓辺のベッドに横たわる親友の姿が見えた。早足で近づき、様子を伺う。静かな寝息をたてていることに心底安堵して、改めて部屋の中を見回してみた。

碧緑色の柔らかいカーテン、やはりアンティーク調で揃えられている家具、小さなシステムキッチンまでついている。やはりホスピス内というイメージは感じられない。音をたてないように気をつけ

ながら、俺は近くにあったパイプ椅子に座り込んだ。

真砂は相変わらず小綺麗な顔立ちをしている。ドイツ人の祖父を持ったクォーターであり、インドア派でもある彼はもとも色白だったが、心なしか青みがかかった肌になったように見える。昔から病弱で入院を繰り返してばかりだったが、通常は学校に通い、部活の声楽に精を出すくらいには元気だったのだ。だから、二日前に入院した時にも、またすぐに退院することを疑っていなかった。その認識が間違っていたと知らされたのは、ついさっき、放課後のこと。同じ学校に通う真砂の妹から聞かされたのだ。

真砂は末期ガンを患っている、と。

その後は彼女の話の聞く余裕も無く、ホスピスの場所だけ聞き、校舎を飛び出していた。電車に乗り込むまでは無我夢中だったが、がたがたと揺られているうちに理解しがたい恐怖が現れ始め、改札を出て歩きながらも複雑な気持ちで絡まりあっていた。だが、こうして親友を目の前にして、俺は、ただ悲しかった。単純な悲しみに支配され、鼻の奥がつんとする。ホスピスとは、死を待つ場所なのだ。その仲間入りを果たしてしまった真砂は、遠からずいなくなってしまう。幼い頃から兄弟のように共に寄り添ってきた者を失うことが、どうしようもなく恐かった。

ふと、真砂の臉が震えた。大きな窓から差し込む西日が眩しいのだろうか。立ち上がりカーテンに手を伸ばすと、不意に名を呼ばれた。

「大地……？」

見下ろすと、琥珀色の瞳が完全に開き、こちらをじっと見つめていた。真砂が目覚めたのだ。何か言おうとして言葉を探すが、この状況で何をどう言ったらいいのか、分からない。名を呼ぶことすら出来ない俺に、真砂は微笑みかけた。いつもと変わらない、穏やかな眼差しで。

「真波まなみに聞いてここまで来たの？」

真波とは、彼の妹のことだ。ぎこちなく頷くと、そっか、と簡易

な返事があつた。会話が途切れ、妙な気まずさが滲む沈黙が続く。俺達の間で会話が途切れることなどしよつちゆうあつたが、それはいつも安心できる優しい時間だった。こんなにも、真砂と一緒にいることが苦しいことなど初めてだった。

「ごめんね」

突然に謝罪の言葉が親友から漏れる。

「ごめん、大地。そんな顔、させて……」

なんでお前が謝るんだよ。とつさに感じた怒りを、パイプ椅子にぶつける。ガシャン、と無機質な音をたてて倒れるのを見て、空しくなつた。軽く痺れる爪先もやるせない。

「いつもの入院だと思つてた」

粘ついた喉からやつと発した声は、みっともなく掠れていた。

「いつも通り、三日もすれば帰ってくるって思つてたのに」

「大地……」

「なんだよ、末期ガンつて。あんなの、もつと年くつた親父がかかるともんじゃないのかよ！」

一番つらいのは、一番理不尽な思いを抱えているのは、真砂だろうに。それでも俺は、どこか真砂を責め立てるような口調で喚くことしか出来ない。そんな俺を淋しげに見つめながら、真砂はただ黙つていた。俺が口をつぐんでから一呼吸おき、彼は静かに述べた。

「大地、僕は急にガンにかかったわけではないんだ。前から患つていた」

どこまでも柔らかな口調で語られた言葉に、俺は全身から血の気が引くような感覚をおぼえた。真砂は普段と変わらぬトーンと、あたたかな響きの独特の声で先を続けた。

「余計な心配をかけたくなかったから、君には言っていなかったけど……僕は前からガン患者だったんだよ。それなりに治療はしていたし、僕だつて治ると信じていた。だけど……この世には、どうにもならないこともあるんだ」

あと少して完全に沈んでしまふ太陽の微かな光を受けて、真砂の

胸元のロザリオがきらめいた。彼はクリスチャンなのだ。教会付属の幼稚園に通ったことがきっかけで、洗礼を受けた。同じ所に通っていても、俺は典型的な無宗教者だ。一瞬輝いたロザリオにそっと指を絡め、真砂は再び言葉を繋いだ。

「でもね、僕は生きることを諦めたわけじゃない。だから、ここに来たんだよ」

「ここ、に……ホスピスに、生きるために……？」

真砂は頷いた。

「お母さんには、病院で延命措置を受けながら生活して欲しいって泣かれたけれど。たくさんのお管を体につけて、少しでも生き延びて何になる？それよりも、僕は生きたいんだ。神様のもとへ帰るまでは、精一杯、生き抜きたい。……そのためにホスピスはある。その人らしい生を全うするために。大地、ここはね、死ぬのを待つ場所じゃないんだ」

だからそんな顔をしないで。そう向けられた微笑には、どこか淋しげな影が落ちている。

「……あと、どれくらいなんだ？」

俺は、気にかかっていたものの聞けなかったことを尋ねた。

「三ヶ月。……お医者さんは、そう言ってたよ」

淡々と述べられる言葉に、ゾツとした。三ヶ月、九十日先には、親友はこの世を去っているかもしれないのだ。急に膝の力が抜けて、その場にへたり込んだ。ベッドから心配そうな声がかげられたが、返事する気力など無い。

考えても仕方が無いのに、どうしようどうしようと、そればかりが頭を巡る。

俺は……どうしたらいいんだろう？

いつ、どこをどうやって帰路についたのか覚えていない。ただ、気がつけば「紫村」（しむら）と表札のかかる我が家の玄関にいた。ドアベルの音を聞いてか、奥から母親が出てきた。陰気な表情をしている。

「おかえりなさい、大地」

声も暗く沈んでいる。元来、明るくさばさばとした性格の彼女なだけに、妙に痛々しい。

「あんたも酷い顔してるわね……真波ちゃんに聞いたのかしら？」

何を、などと聞かなくても分かっている。真砂のことだ。母さんも知っているのかと聞くと、梅田さんから電話があったと返ってきた。母親同士も仲が良く、長電話などしょっちゅうだ。だが、今回はやはり楽しいおしゃべりになど、なりはしなかつただろう。

「俺、さつき行って来たんだ。真砂のホスピス」

「そう……まーちゃん、どうしてた？」

母さんは真砂のことを昔から「まーちゃん」と呼ぶ。

「普段どおりだった。むしろ、俺の方がボロボロだよ」

「……まーちゃん、昔から強い子だったものね」

真砂の強さというものは、腕つぶしの強さではない。精神的な強さをもっているのだ。幼い頃から真砂は、その外人風の容姿のためにイジメを受けていた。小学生低学年の頃に、真砂を罵り殴ってきた相手を俺が返り討ちにしたことがある。もつれあいながら殴り合う俺達を、真砂は悲しそうに止めようとした。自分が殴られるのはいいけれど、大地が殴られている姿も、人を殴っている姿も見たくはないのだ、と。それ以来、真砂が悪し様に言われて悔しい思いをしても、俺は何もしなくなった。

「でもね、まーちゃんが平気そうに見えても、本当に平気かどうかは分からないでしょ。あんたが支えてあげなきゃね」

母の言うことはもつともだと思う。だが、それでも俺は自分が何をすべきなのか検討もつかずにいた。ダイニングテーブルに放置さ

神様の子供

れているAO入試の案内状が、ひどく煩わしく感じた。

2：俺の力で

翌日は土曜日で学校も無く、俺は午前中からホスピスに向かった。受付で名前を記入していると、聞き覚えのある歌声が聞こえてきた。見れば、ロビーの片隅のソファで幼い女の子を膝に抱き、童謡を歌っている親友の姿があった。男のような低音でもなく、女のように甲高い声でもなく、中性的で不思議なトーンだ。

数々の歌唱コンクールで入賞してきた真砂。審査員からの評価も常に高く、神秘的な声に皆が酔いしれた。音楽雑誌の取材も何度か受けていた。「柔らかく澄んで響く低音、穏やかで優しい高音の持ち主」などと評されていた。

今も、通りがかりのスタッフやホスピス利用者が足を止めて聴き入ったりしている。やはり立ち尽くして彼の歌を聴いていた俺の肩を誰かが叩いた。振り返れば、ふわふわとした栗毛の少女がいた。真砂の妹、真波だ。

「今日も来てくれたんだね。……お兄ちゃん、心配してたよ？大地がひどく落ち込んでて顔色悪かった、って」

病人に心配されるとは情けない。

「昨日は……シヨックも大きかったから。今日は昨日よりは落ち着いたさ」

ならいいけど、と真波は明るく笑ってみせた。この妹は、予想よりもずつと元気に振舞っている。昔から泣き虫でメソメソしている性格だっただけに、違和感を感じる。そのことを疑問に思っていると、彼女はこんなことを口にした。

「私もね、ものすごく泣いたよ。でも、私が泣いてばかりじゃお兄ちゃんだって辛いもんね。笑って、笑って、明るい毎日にしてあげたいんだ。……最期まで」

心の中でもやもやと沸きあがっていた陰湿な感情が晴れていくようだ。前向きに考えられる真波を俺も見習わなくては。あいつのた

めに、何が出来るんだろう。考え込む俺の横で真波がポツリと呟いた。

「お兄ちゃんの歌、ほんとに綺麗。あと少ししか聴けないなんて……勿体無いなあ」

「そうだ。歌だ。突然、俺の頭に閃きが走った。音楽と共に生きていきたいと願っていた真砂の歌を、世界に届けたい。」

「俺も、勿体無いと思う」

あいつの心を、声を、歌を。誰にも届けずに殺してしまうなんて、勿体無さ過ぎる。だから、届けてみせよう。世界に。

月曜日の放課後、俺は音楽室に足を運んだ。そこではすでに声乐部の活動準備が始まっていた。圧倒的に女子部員が多い教室へ踏み込むのは少し戸惑いをおぼえたが、俺は中に入り、様々な視線を浴びつつ、音楽教諭に近づいた。中年の女性教諭は、俺の姿を見て柔和で上品な微笑を浮かべた。

「ああら、紫村君。珍しいじゃありませんの。どうかなすって？」

「実は、真砂……梅田のことで」

真砂の名を出したとたん、教諭は顔を歪ませて溜息をついた。白髪交じりの髪に手をやりながら、やりきれなさそうに呟く。

「梅田君……まだまだ、これからですのに。残念、なんて言葉では表現できませんわね……」

ことのほか真砂を可愛がっていた人だから、辛い気持ちも大きいのだろう。

「先生。梅田が書いていた楽譜を持っていませんか？」

「梅田君が作曲してた楽譜のことかしら。彼が持ってきて欲しいとあなたにお願いしたの？」

「はい……そうですね」

嘘だった。しかし、音楽教諭は仲がいいのは良いことだと喜んで、奥の準備室からどっさり楽譜を持ってきてくれた。後々お見舞いに伺うと伝えて欲しいと丁寧頼まれ、俺は胸の奥がチクリと痛んだ。罪悪感を感じないわけではないが、しかし、それも言っていない状況でもある。すぐに行動に移さなければ、間に合わないかもしれないのだから。苦い気持ちで真砂の譜面を鞆にしまっている、一人の女子生徒が話しかけてきた。長いお下げ髪のおとなしそうな彼女は、真砂とよく話していた奴だ。確か、名前は野崎明日香（のぎき あすか）

「あのね……梅田くん、どうしてるかな。元気……かな？」

おどおどとした話し方だが、声は綺麗だ。さすがは音楽部。普段通りにしていると言うと、安心したように表情を緩めた。

「そ、それでね……紫村くん。梅田くんの楽譜、どうするの？」

ドキリとした。周囲で聞き耳を立てている生徒はいないが、自然と声が小さくなってしまふ。

「どう、って……？」

「……ごめんね。何となくなんだけど、梅田くんが持って来てって頼んだんじゃない気がするの」

見かけによらず鋭いな。違ってたらごめん、とあたふたする彼女に苦笑する。とてもごまかせそうにないから、俺の考えていた計画を小声かつ早口で教えると、野崎の顔が輝いた。

「素敵！わ、私も応援するよ。……その、あ、あんまり力になれないとは思っただけど」

「いや、俺は全然音楽の知識がないから、助かる。……じゃあ、本格的な練習に入るみたいだから、俺はもう行くな」

「うん。……あ、明日、またお話しよう」

はにかみがちな笑顔を残して、野崎は部員の整列に加わった。俺も音楽室を後にする。いつも部活帰りに真砂と待ち合わせしていた談話コーナーを通り過ぎ、今度は俺が所属する化学部の部室である

実験室に向かった。たてつけの悪い戸を騙し騙し開けると、神経質そうな顔をした、部長であり同級生である小野寺睦月おのでむつきが出迎えてくれた。ちなみに部員はこいつと俺と下級生一人しかない。来年からは同好会に格下げされることが既に決定している。

「どうした、紫村。景気悪い顔してるぜ」

「そういうお前はいつ見ても神経質な顔してる」

「ほっとけ」

国立大学を目指す小野寺は、部活から戻るとすぐに家庭教師との格闘が待っている。ストレスで人相が悪くなっても仕方が無い状況ではある。だが、人相と口は悪いが、根はとてむい奴だ。ふざけんなよ、面倒くせえと言いながら、人の世話を焼くのが趣味のような人物である。

「あんな、俺、しばらくここに来れない」

「……なんで」

俺の唐突な言葉に、彼の眼鏡の奥の瞳が大きく見開かれる。俺たちとクラスが違うし、噂話に加わるような人柄でもない小野寺は何も知らないのだろう。真砂がホスピスに入ったこと、彼が亡くなるまでは出来るだけ傍にいたいことを話すと、小野寺は低く唸った。

「冗談にしては笑えねえけど……信じられねーな。この年で……末期ガンかよ」

苦々しげに呟かれるのに黙って頷く。まったくもって同感だった。「このことは気にすんな。……お前の気が済むように、後悔しねえようにするんだな」

「……ああ。ありがとう」

「でもお前、大学とかどうすんだよ」

AO入試を狙っていると言うと小野寺は、それだけはちゃんと受けに行けよ、と助言して来た。

「お前が余りにも梅田にかかりつきりだと、逆にアイツも窮屈な思いですんだからな。最低限、自分の生活水準は維持することだ」

小野寺の言葉でハツとした。そうだ、俺ばかりが暴走しては真砂

にも負担がかかる。それに気づかせてくれた、という意味もかねて再度礼を言つと、相手は照れくさそうに実験マニュアルを開いた。本が上下逆さまに引っくり返っているのにも気づいていない。俺は久しぶりに声を出して笑った。

3…さあ、はじめよう

音楽教諭、野崎、小野寺からのメッセージを伝えると、真砂はとても喜んだ。今日は少し顔色がいい。もしかしたら予定よりも長く生き延びてくれるかもしれない、と微かな希望を抱きそうになった自分を諫めた。

「先生はともかく、野崎さんとか他の部員のみんなは怒ってなかった？大会も近かったし、僕はソロパートももらってたから……。まさか大会にだけ出るわけにもいかないしね」

「……そうか？」

首をかしげる真砂に向き直る。パイプ椅子がギシツと音をたてた。「俺は、出来るだけお前の歌を多くの人間に聴かせるべきだと思うけどな」

だから、大会だけに参加してもいいのではないかとさえ思う。しかし、真砂は苦笑して首を振った。

「それは……確かに、みんなは大会だけ出てもいいと思うだろうけど。その言葉に甘えるにしても、もたないんだ、僕の体力自体が。君も知ってるだろう？二学期に入ってから、僕は体育の授業をひとつも受けてない。……もう、随分と衰弱してしまっているんだ」

きつと、皆と一緒に団体行動で一日行動するのが難しいのだろう。舞台上では照明による暑さに耐えながら歌わなければならない。以前から真砂は、大会やコンテストといったものに参加した後には疲れで熱を出していた。今では尚のこと負担がかかるのだろう。

「じゃあ、お前一人に念頭をおいて、全てをお前中心に考えれば歌えるか？」

「……どういふこと？」

怪訝そうに眉をひそめる真砂に、俺は秘めていた自分の計画を話した。

「俺、音楽会社にかかけあってみるつもりなんだ。お前のことを話し

て、お前の歌のCDを……出して欲しいって。自分でも無謀だと思
うけどな、諦めたくないんだ。お前の歌を、世間に広めたいんだ」

「大地……」

「お前がデビューなんて俗物に興味ないのは分かってる。けどな、
勿体無いだろ。お前、そこらの訳分かんない歌手なんかと比較にな
らないくらい綺麗な声してるじゃないか。歌だつて上手い。……そ
の生の声が消えてしまうというのなら、せめてCDという形で残し
て、そして知って欲しいんだ。梅田真砂のことを」

真砂がこのまま生き続けるというのなら、何千・何万という人が
彼の歌を聴くことになっただろう。でも、彼の命はそう遠くはない
未来に奪われる。ならば、せめてCDで色々な人に聴いて欲しい。
こんなにも美しい声が、確かに存在していたのだと知って欲しい。

「こんな学生が、大人に相手にしてもらえないはずはないけど。……

でも俺、頑張るから。もしもそれが叶ったら……歌つて、くれよな」
「大地……、どうして、そんなに一生懸命に僕のこと考えてくれる
の？」

琥珀色の瞳が泣きそうに潤んでいる。俺はくしゃりと真砂の髪を
かきませた。昔から変わらないサラサラの猫毛だ。

「馬鹿だな。俺達、親友だろ？……他に理由なんかねえよ」

そう、親友だから。大したことをしてやれない不甲斐なさが苦し
いけれど、力になりたい。図体ばかりでかくても、まだ子供だから
大人より知識も権力も財力もない。それでも何か出来ることがある
というのなら、全力でやりたい。

「俺、頑張るよ」

だから、お前も……。俺の意志を汲み取ったのか、真砂は大きく
頷く。その拍子に、透明な雫がひとすじ彼の頬を伝った。とても純
粋で、美しい涙だと思った。

翌日の昼休み。野崎が遠慮がちに俺の机までやって来た。

「あ、あの……紫村くん、ちょっといいかな」

「うん。なに？」

「あの……梅田くんのね、計画のことで」

彼女はクリアファイルから何やらリスト表みたいなものを取り出した。手書きで作られたと思われるが、字も表も丁寧で見やすい。

会社名と電話番号、住所がずらりと並んでいる。

「こ、これね、今までに梅田くんがインタビューや取材を受けたことがある音楽会社なの」

「へえ……けっこうあるな」

「大小あわせたら、割とあると、お、思うよ。……ただ闇雲に回るよりも、こ、こっやって前にも関わったことある所の方がいいかな、って」

余計なことだったかな、と不安そうな野崎に首を振って笑った。

「まさか。すっげー助かる。実はさ、どっから行けばいいのかわからなくて途方にくれてたんだ。……サンキュ」

野崎は顔を真っ赤にして、意味無く何度も頷いた。長いおさげもブンブン揺れる。本当にシャイなんだな。

「野崎がお大事になって言っただって伝えたらさ、真砂すげえ喜んでたよ。今度さ、一緒にあいつのとこ行ってみたいなか？きつと喜ぶ」

「ほ、ほんとう？私……行ってもいいのかなあ」

「もちろん。野崎さえよけりゃな」

「わ、私なんて！いいに決まってる。……梅田くんに、会いたい」

野崎の様子を見て、ああ、と納得した。彼女は真砂に好意を寄せているのだらう。だから、真砂のためになるなら俺にも協力してくれるんだ。真砂は野崎をどう思っているんだらう。そういえば、恋愛にまつわる話なんてしたことがない。この二人なら、なかなか似合いのカップルになるんじゃないかと、思った。

その日から、俺は放課後になるとすぐに野崎にもらったりリストをもとに色々な会社を訪ねる日々が続いた。世の中そう甘くは無い。一般の高校生が押しかけたところで、てんで相手にしてもらえない。時には結構な遠出になることもあり、俺にもそれなりに疲れが溜まる日々だった。そんな調子だったから、毎日真砂に会っているにも関わらず彼の心の揺れに俺は全く気づいていなかった。そういうしっているうちに、真砂がホスピスに入って三週間がたっていた。

4：大人

「だからね、前に来てくれた時も言ったと思うけど。どんなに歌唱力があつたつて、その子、もうすぐ死んじゃうわけでしょ？」

以前訪れたことのある音楽会社に再び訪問していたのだが……。

俺は目の前の男を殴りつけたい衝動を必死にこらえていた。

「悪いけどねえ、長い間使えそうに無い子のCDを出すわけにはいかないね。こつちだつてビジネスなんだからさあ」

「……………そうですか」

怒りで声が震える。それ以上何も聞きたくなくて、俺は鞆を掴むようにして立ち上がり、挨拶もなしに応接室を出た。ビジネス、だつて。人間を道具のように見ているのか。胃がムカムカとして、吐き気がおこる。こんな大人ばかりだ。嫌になる。行き場の無い怒りを拳に込め、思い切り壁を殴りつけた。思ったよりも大きな音が響き、通りがかりのスタッフが足早に去つて行く。

「ね……………君」

足音荒く会社の玄関を通り過ぎた所で、穏やかな声に呼び止められた。振り返れば、やや長めの黒髪を風に揺らす青年が立っていた。線が細く、女つばい顔をしている。

「何か、困っているのかい」

「……………」

「ここ最近、私もいくつか音楽会社を回っていたんだけどね。何度か君の姿を見て。ミーハーにデビューを無心しているようには見えなかったから、気になっていたのさ」

優しい笑顔を向けられて、いくらか心が落ち着いてきた。

「良かったら、何をお願いして回っていたのか聞かせてくれないかな。もしかしたら、力になれるかもしれない」

知らない人についていってはいけません。いくつになっても母親が口をすっぱくして繰り返す掟。けれど、この人ならば信じられる

気がする。そう直感で感じて、俺は彼についていった。

近くの喫茶店で飲み物を注文した後に、彼は名刺を渡してきた。知らない会社名と、代表取締役の肩書き、そして琴岡ことおか優雅ゆうがという名が記されている。

「お若いのに……代表取締役、ですか」

「ふふつ、やっぱり若く見えるのかな。私はこれでも三十路だよ。家庭ももってる」

俺は絶句した。どう見ても二十歳になるかならないかの青年にか見えない。化粧品のコムに出したら売り上げが飛躍的に上がりそうだ。失礼を詫びると、琴岡さんは特に気にした様子も無く笑ってくれた。おおらかな人のだろう。

「私はね、とても小さいけれどもレコード会社を運営しているんだ。赤字ギリギリの極貧会社なだけどもね。だから、とても力は弱いんだけど……それでもよければ、話してごらん」

その言葉に甘えるかのように、俺は一気に真砂のことを話した。琴岡さんは少し驚いた表情をしながらも真剣に話を聞いてくれる。今までのように、小馬鹿にした眼差しではなく、正面から向かい合ってくれる大人の姿が、俺には本当に嬉しかった。

「紫村くん、そのホスピスの名前は？」

ホスピスの名を告げると、琴岡さんは何か納得したように頷き、悲しげに溜息を吐く。

「……そこにはね、私の妻が入っているんだ。この前、娘が綺麗なお兄ちゃんに歌を歌ってもらったって、とっても上手だったって大喜びして帰ってきたんだけど……そのお兄ちゃん、君のお友達かもしれないね」

俺の頭を、数週間前に目撃した少女の姿がよぎった。真砂の膝に抱かれていた、幼い女の子。きつとその子が琴岡さんの娘なのだろう。すごい偶然もあるもんだ。

「君の気持ちは痛いほど分かる。私だって、妻のために出来ることは何でもしたいし、彼女の望みを叶えてあげたい。君も、その子の

夢を何としても実現してあげたいんだね」

「はい。そして、伝えたいんです。他の誰かに、真砂の歌を」

俺は鞆からそっと真砂の譜面を出した。琴岡さんに渡すと、さっと目を走らせた彼の瞳が見開かれる。

「琴岡さん。それは、真砂が書いた譜面です。俺には楽譜が読めないし、歌詞が外国語で書かれていて分からないけど。そこには、真砂の想いが込められているはずですよ……見てやってください」

分厚い紙の束を夢中になって、琴岡さんは読んでいく。次第に目に興奮の色さえ宿り始めた。きらきらと輝いている。

「なんて純粹で……優しい、美しい歌なんだ」

琴岡さんがハミングで旋律を奏でる。きつと、譜面に書かれているメロディラインを口ずさんで確認しているのだろう。小さくてもさすがは音楽会社の社長だ。どこか物悲しいながらも懐かしくて温かなメロディが、彼の唇でしばらく奏でられる。

「紫村くん。ぜひ一度、真砂くん本人と話をする機会をくれないかな。……勿論、CDデビューを前提とした、ね」

「琴岡さん……有難う御座います！」

「無名同然の会社だが、全力で頑張ってみよう」

「はい！」

固く握り合った手のぬくみが、これほど温かったことはない。

その日は、既に結構な時間が経っていたため、真砂の所には寄りなかつた。

5：隠さなくていいんだ

次の日、話が大きく前進したことを聞いて野崎は涙を流して喜んだ。彼女の喜びの声も受けて、放課後にホスピスに向かう俺の足取りは軽かった。真砂が笑顔で迎えてくれることを信じてやまずに……。

しかし、面会受付をしていると、女性スタッフが遠慮がちに声をかけてきた。

「真砂くん、お部屋にいないですよ。……昨日も、ここの付属の小さなチャペルに籠りつきりです。ご飯も食べなくて。」

「え……」

「数日前からおかしかったんですけどね……ずっと、ふさぎ込んでいて」

毎日のように通っていたのに、俺は全く気づいていなかった。スツツに礼を言い、中庭を突っ切った先の狭い林の中にあるチャペルを目指す。最近では頻繁に雪がちらつくようになり、うっすらと白っぽい景色が広がっている。チャペルには普段は誰もいないという。定期的に牧師がくる時以外は無人の場なのだそうだ。きちんと暖房器具を使っているといい、そう願って足を速めた。

「真砂……?」

古い木の扉を押し開くと、込められていた冷気に体を包まれる。そして、夕陽が照らす鮮やかなステンドグラスの光を受けながら、祭壇の前にへたり込んでいる真砂が見えた。白いシャツの上にジグザグに降り注ぐ何色もの光が翼のようだ。

「だい、ち……?」

「お前、何やってるんだ、こんなに寒い所で。……戻ろう」

振り返る真砂の顔は青白い。彼は力なく首を横に振った。

「僕、戻れない……罪深いから」

「何を言ってるんだよ。お前は信心深い教徒の見本みたいな奴だろ

う

真砂は再び首を振った。今度は、泣きそうにクシャリと顔を歪ませながら。

「違うよ。罪深いんだ、僕は。祈っても、祈っても、この体に染み付いて……消えてくれない」

すぐるような視線が向けられる。琥珀色の瞳は、様々な色を反射しながら、俺に哀しみを訴えてきた。痛いくらい、まっすぐに。

「僕は、駄目なんだ……。君や、家族や、色々な人が僕の死を悲しんでくれて……。惜しんでくれて、涙も流してくれて。みんなは、とっても辛くて、胸を痛めてくれるのに……。僕は、それを嬉しいとすら感じてしまっただよ」

「……………」

「僕みたいなのでも、惜しんでくれるんだ、って。いなくならなくて、想ってくれることが……。嬉しくて。みんなは心に傷を負っているのに。……罪深い」

そのどこが罪だというのか。自分の存在を否定されないことは、誰だって嬉しい。それがどんな状況であれ、喜びに変わりはない。

そう伝えようとする直前、搾り出すような声を真砂が発する。

「でも、……僕は、もっと罪深い気持ちを抱えてる。神様も呆れてお見捨てになるよ、きっと」

俺が真砂に近づく靴音が響く中、彼は先を続けた。

「僕……神様の国に入れて頂けるのに。幸せな天上で、神様が待っていてくださるのに。……怖いんだ」

隣に同じように座ると、真砂が縋りついてきた。カタカタと小刻みに震える細い体は、腕を回しても十分に余ってしまう。こいつ、また瘦せた。抱き返してやりながら、刺さるような胸の痛みを感じる。

「怖いよ、大地。どんなに強がったって、平気なフリしたって、本当の気持ちは消えてくれないんだよ……!!」

「真砂」

「本当は、怖くて怖くてたまらないんだ。僕、死にたくないよ！本当は、生きてたい。もつと、もつともつと、生きてたい……！どんなに罪深いと自分を諫めても、今までも十分に生きてきたじゃないかって納得しようとしても、全然駄目なんだ……神様の子供なのに」

しゃくりあげながら、自分の胸の内を晒して、必死に縋ってくる。俺は、そんな真砂の柔らかい、幼い頃から全く変わらない感触の髪を撫でた。小さい頃もこうして、しょっちゅう頭を撫でて慰めていた。

「お前、ほんつと馬鹿だな……。それが当たり前なんだよ、人間なんだから」

「大地……」

「お前はな、真砂なんだよ。神の子の前に、人間なんだ。梅田家の宝物で、俺の親友で、たくさんの人に愛されている……人間の子供なんだ。死ぬのが怖くないわけねえだろうが。強がってんじやねえよ、馬鹿」

真砂から本格的な嗚咽が漏れる。それを聞くうちに込み上げてきたものを、俺も堪えることが出来ない。視界が滲むのを感じながら、俺はあえてそれを放っておいた。

「お前な、あと三ヶ月しかねえんだろ。もつと貪欲に生きるよ！もつと、甘えるよ、我俣言えよ、弱みも見せるよ。生きてるうちから、天使みたいになってんじやねえよ！」

もつと俺にも頼れよ。腕に力を込める。折れそうに華奢な体に確かな病魔を感じて、またじわりと涙が浮かんだ。

「何で……何で、お前なんだよ」

神がもしもいるというのなら。ひとつ、聞きたいことがある。どうして、綺麗なものから奪っていくんだ。天界にふさわしい人間から連れ去って、醜いものに囲まれる俺達を嘲笑っているのか。真砂が何をしたっていうんだ。こんなにもお前を慕って生きる純真な命を、なぜ奪う。

「大地……泣かないで」

「泣いてんのは、お前だろ」

「君だって、泣いてる」

そつと触れてくる細い指ごと、俺は真砂の手を掴んだ。首をかしげる彼の頬で、涙の跡が光に反射して煌めいた。

「証を残そう。お前が生きた、証を」

琴岡さんのことを話すと、真砂はひどく驚いた。琴岡婦人やその娘とよく話すのだと言う。CDを出す前提で話をしにくるらしい、と告げると、真砂の頬に微かに赤みが戻った。

「希望が見えてきた。……頑張れるか？」

「うん。大地、ありがとう。……本当に、よかった。CDがどうのつていうよりも、大地の気持ちか形になって、嬉しい。……神よ、感謝します」

真つ赤な目でありながらも、真砂は晴れ晴れとした笑顔を見せてくれた。このまま、ずっと……そんな笑顔で生き抜いてくれよ、真砂。最後の、最期まで。

6：理解と納得は別物で

それから幾日もたたないうちに、琴岡さんは真砂のもとを訪れた。実際に真砂の歌唱力に触れ、彼のCDデビューに誰よりも息巻いている。真砂自身が作った曲で出し、なるべく多くの曲数を残せるようにアルバム形式にするらしい。真砂も譜面の手直しをしているが、それを編曲している作曲家は徹夜で作業しているという。申し訳ないと何度も言う真砂に、その作曲家は気持ちのいい笑顔で首を振った。こんなにも素晴らしい心躍る編曲は久方ぶりだと、そう言つて。「あの難しい村井さんが……ああ、編曲をしている人の名なのだけれどね。村井さんが楽しそうに作業している姿なんて、初めて見たよ。それだけ、真砂さんの曲には魅力があるってことだね」

真砂の部屋で、琴岡さんが感慨深げに呟く。そして、恐縮がる真砂を叱咤激励していった。

「もっと胸を張りたまえ。君は一人前の音楽家だ」

そうしてせわしなく時間が流れてゆく中、野崎を連れて真砂のもとを訪ねた。傍目から見ても浮き足立っている野崎。密かに想いを寄せる相手と久しぶりに会えるのだ。それはもう、嬉しいのだろう。部屋の前で深呼吸している彼女を、微笑ましく思った。

そつとドアを開けて、彼女を先に通す。すると、ビックリ、と大きな震えが野崎の肩を揺らした。どうしたのかと心配になったが、野崎は何もなかったかのように微笑んだ。

「梅田くん。……久しぶり、だね」

「うん。わざわざ来てもらって、ありがとう。嬉しいよ」

「うん……私も、嬉しい」

何だかいい雰囲気だな。そう思って、俺は退散することにした。黙って出て行こうとしたのだが、真砂に見つかってしまふ。

「大地、どうしたの。何か用事？」

「いや。俺がいない方が話しやすいだろう」

「そんな！僕がいつ君を邪魔者扱いしたっていうんだ。ここにいないよ」

「いや、そうじゃなくてさ。お前じゃなく、野崎のためだ」

野崎が何か言いたげに真つ赤な顔で口をパクパクさせていたが、俺はひらひらと手を振って部屋を出た。頑張れ野崎。今の所、お前の片思いっばいぞ。……まあ、もしかしたら結ばれたほうが切ないのかもしれないけども。

自動販売機が立ち並ぶ休憩コーナーに行くと、ロビーから歩いてきた真波と鉢合わせした。短く折られたスカートが目につく。もう雪が降る季節に入っているのに寒くないのだろうか。女子高生は遅しいな。

「今、来たのか」

「うん、日直の仕事があつたから。お母さんは今日、仕事で来ないつて。大地は買い物？」

「いや。真砂の彼女が来たから気をきかせて出てきた」

「えっ。お兄ちゃん、彼女さんいたんだあ」

大きな目をさらに見開いて驚く真波。昔から冗談を本気にする奴だ。嘘だと言つと、頬をふくらませて拗ねた表情をする。こんなところも、全く変わらない。梅田家の兄妹は純粹培養で育っている。「彼女じゃないけどさ、たぶんその子は真砂が好きなんだと思う。だから、気をきかせたんだよ」

「ふうん……。ね、大地は彼女いないの？」

なぜ俺にふる。俺は思い切り不機嫌な声で返した。

「いるはずねえだろ」

「そっか。……えへ、良かった」

「はあ？」

「う、ううん。何でもないよ。あ、ねえねえ、じゃあさ、その人が出て来るまでここで待ってようよ。ここだったら必ず通るから、彼女が来たら分かるもんね」

何となくひっかかりを感じたが、とりあえず真波の話題転換に乗ってやった。二人で缶ジュースを飲みながら、他愛ない話をする。俺がAO入試に通って進学先が確定したことや、真波たちの両親の話などしたが、次第に話題は当然のように真砂のことになった。

「最近のお兄ちゃん、キラキラしてるよ。大好きな音楽がめいっぱい出来て嬉しいんだね」

「そうだな」

「あんなに元気な姿を見てたら、末期ガンだなんて嘘みたい。……でも、最近咳も多いんだよね」

「……移動も車椅子を使うことが多くなった」

「食欲も、低下してるし……」
「……やめよう、真波。あいつはまだ生きてるんだ。笑顔だって消えてない。十分だよ」

真波は人形のような無表情で頷いた。真砂の笑顔に直接触れている時には、どこか安心する。でも、離れると不安になる。今こうしている間にもしも真砂が息絶えていたら、などと縁起でもないことを考えてしまう。真波もきつとそうだろう。ご両親だってそうに違いない。

「お兄ちゃん、体はどんどん弱ってるけど、心は元気だよ。一期、すごく塞ぎこんでたけど元気になった。……大地がいるから」

「なんだよ、それ」

「お兄ちゃんが言ったの。家族には隠しちゃう弱さも、みつともない所も、大地は見つけちゃうんだよ、って。それで、大地は受け止めてくれるって分かってるから、甘えちゃうんだって。小さい頃からそうだったって」

「それは……お互い様だよ」

真砂はどんなイジメにあっても、親の前ですら泣かない子供で。

俺は両親が仲が悪いが、彼らの激しい喧嘩を目の当たりにしても平気なフリをした。だけど、真砂は俺の傍で泣いたし、俺も真砂の横でへこんだ。そうやって、相手や自分の傷を舐めあいながら生きてきた。ある意味で家族以上の絆が俺たちの間には存在するんだ。

「俺、毎日ビクビクしてる。今日にもあいつが逝ってしまうんじゃないかって」

「うん……私もだよ。パパと、ママも」

「昔の人間が妙な術に頼って、不老不死だとか生き返りだとかを成功させようとした気持ち、良く分かるよ。あれってさ、きつと自分のためじゃないんだよな。大切な人の命を永らえさせるためなんだよ」

「魔法使い、いたらいいのにね」

しみみりとした空気の中、二人して黙り込む。その時、パタパタと走る騒がしい音がして、野崎が現れた。俺たちに気づいたのか、立ち止まった。その拍子に、彼女の双眸から涙が零れる。

「おい、どうした……真砂に何か言われたか？」

くしゃくしゃに表情を崩して、野崎は何度も首を横に振る。顔にかかる長い髪も払わずに、彼女がしゃくりあげながら発した声は悲痛なものだった。

「知らなかった……あんなに痩せてたなんて……か、顔もっ……青白くて」

「野崎……」

「信じたくなかったのに……死んじゃうなんて。で、でも……信じないわけに、いかないよお」

その場に座りこんでしまった野崎の背を、真波が優しく撫でていく。ごめんなさい、そう何度も繰り返しながらの嗚咽が胸を締め付けてやまない。わかってる。野崎だって泣きたいわけじゃないんだ。だから、さつき部屋に足を踏み入れた瞬間にも無理やり笑顔をつくったのだろう。ひとしきり泣いた後、彼女はポツリと呟いた。「

神様の子供

私に何ができるかな」と。少し前の自分自身を見ているような、そんな気がした。

7：唇におまじない

翌日のホームルームで、野崎が発言した。内気な彼女が積極的に発言することに驚いたが、その内容にまた驚いた。真砂のために、クラスで何かしないかとの発案。これにクラスメイト達もおおいに賛同し、ロングホームルームの議題となった。寄せ書きか千羽鶴かなど色々な案が出る。受験を控えた学生ばかりだから大々的なことは出来ないが、心をこめて出来るものを、と真剣だ。結局まだ結論は出ていないが、皆の気持ちがあたたかかった。帰り支度をしていると、隣のクラスの小野寺が教室に入ってきて、声をかけてきた。

「よお、紫村。今日も梅田のとこ行くんだろ。俺も連れてけよ」

「全然かまわないけど……お前、カテキョは？」

「サーボーリ」

「いいのかよ、そんなんで。お前の母さん、口うるさいんだろ」

「それどころじゃねえんだよ。梅田に見せたいもんがある。あいつの部屋、コンセントあるよな？」

コンセントならある。しかし、どうしたというのだろう。不審がる俺にニヤリと笑いかけ、やけに大きな手提げ鞆を手にして小野寺は歩き出した。行こうぜ、とせかす声に俺も足を早めて追いつく。

小野寺の訪問を、真砂も喜んで迎えた。小野寺はベッドに付属しているテーブルをセットし、鞆からノートパソコンを取り出した。パソコンが入っていたから大きな鞆だったのだろう。手際よくカード型の接続機器でインターネットに接続してゆく。

「小野寺くん。わざわざこんなに重いもの持って来て、どうしたの？」

「いーからいーから。黙って見てな。梅田に見せたいもんがあるんだ」

口調はいつもの通り軽快な小野寺だが、瞳は真剣だ。やがてひとつのページを表示して、小野寺は真砂の方へパソコンを向けた。そ

れを覗き込んで、真砂はハツと目をみはる。俺も驚いた。

「小野寺くん……コレ」

「梅田真砂を応援するページ、とでも言うか。梅田のおかれてる状況とか、CDの話なんかを乗せてみたんだ。無許可でやつちまってゴメンな。でも、開設一週間で、こんなに反響があつたんだぞ」

小野寺がマウスを操作して、サイト付属と思われる掲示板を見せしてくれた。そこには、顔も知らない人たちから真砂への無数の応援メッセージで溢れている。

「俺がもともと自分のホームページ持ってて、ネット友達がいっぱいいたんだよ。で、そいつらが友達に広めて、またその友達も……てなネズミ算式に広がっていったんだ」

「すごいね……」

「梅田、このメッセージのひとつひとつに目を通せ。色んな人がお前を待ってる。お前が世話になってる音楽会社の人から礼のメールが来たぜ。このサイトを通じて、梅田のCDに対する問い合わせがたくさん来てるって」

顔を輝かせながら、真砂は掲示板のメッセージを読んでいる。それを温かな目で見守る小野寺に話しかけた。

「お前……いつの間に」

「ああ。紫村がさ、梅田のためにとって奔走してる時から思ってた。俺には何が出来るか、ってな。梅田がデビューを決めたときに、これだっと思ってたんだ。ここまで広がるとは思ってなかったけどな、地味に梅田のバックアップをしようって思ってた」

途中、真砂が顔を上げて丁寧に小野寺に礼を言った。小野寺は気にするな、と照れ隠しのそっけない態度で先を読むよう促す。それに素直に従う真砂を見つめながら小野寺の唇が動いたのを、俺は見てしまった。頑張れ。間違いなく、そう動いていた。

真砂が本格的に録音のためにスタジオに通う生活が始まった。午前中に琴岡さんが迎えに来て、午後にはホスピスに戻って休息をとるという毎日だ。体に負担がかかることをホスピススタッフも心配していたが、本人が楽しんでいるためか、それほど大きく体調不良は出ていない。痛み止めを打ちながら頑張っている。

「明日、退学届けを出すんだ」

そんな話が真砂から出たのは土曜日の午後だった。

「その時に最後の学校見学を許可してもらってるんだけど、大地も一緒に来てくれる？」

もちろんと快諾すると、嬉しそうな笑顔が向けられた。側にいた真砂の母親にも礼を言われた。

「ありがとう、大ちゃん。なんだか真砂がたくさんお世話になっちゃってるわ」

俺は幼い頃から大ちゃんと呼ばれている。うちの母親が真砂を、まーちゃんと呼ぶのと同類だ。

「いえ……俺は他の奴より時間もあるんで」

「でも、自分の時間を割いてくれるのには変わりないもの。私も主人も仕事が抜けられない時でも、大ちゃんがいるから安心できるの」

「昔から、僕がお留守番の時には大地に面倒みてもらってたよね」

共働きの真砂の両親が揃っていないときには、真砂と真波は俺の家に来て、俺の部屋に泊まっていた。真波は肝が据わっていたのか、環境が変わってもアツサリと寝る奴だった。逆に真砂は変に神経質で、なかなか寝付けなかった。俺も放っておけなくて、一緒に起きていた。

「ふふっ……大地がキスしてきたのには驚いたけどね」

「馬鹿！その話はもうするなって言ってるだろ」

海外アニメのビデオを見ていて、母親が子供におやすみのキスをしているシーンを見た。それまで愚図っていた子供は、母親にキスされた途端におとなしく眠りについた。何も知らないガキの俺は、これだ、と思った。そして、不覚にも真砂にキスしてしまったというエピソードがある。今思い返せば、何が悲しくて初めてのキスの相手が真砂なのかと悔やまれるが、当時の俺は純粹に、真砂がぐっすり眠るようになったことに満足していた。

「ごめんごめん。……でも、おまじないみたいで好きだったよ」

「げっ、薄気味悪いこと言うなって」

「小さい頃のは・な・し。今はこっちだつて願い下げだよ」

しばらく睨み合っていたが、すぐに吹き出してゲラゲラ笑い合う。今日もまた穏やかな時間が流れていくことにホツとした。

8：君に約束、己に誓い

人気のない校舎というものは、変に不気味で不思議な空間だ。日曜だというのに、俺と真砂は揃って制服を着用して登校した。この制服を着るのも最後だ、なんて余りにも自然に笑う真砂に胸が痛む。退学届けを受け取った校長・教頭両名も何ともいえない表情だった。一階を一緒に見回り、階段にさしかかった所で、車椅子を押していた俺は先生達を振り返った。

「先生、上の階も見てきていいですか」

「もちろん、全然構わないのだが……、この学校にはエレベーターも無いし、車椅子だと難しいのではないかな」

「あ、車椅子はいりませんよ。俺が背負ってきますから」

「大地、無理だつて。もう十分だから……」

「かがみこんで、おどおどと発言している真砂と視線を合わせる。」

「見たいだろ、音楽室とか、自分の教室とか」

「……………うん」

「だったら素直になれよ」

背中を向けると、しばらくして温かな感触がのしかかってきた。

そのまますんなりと立ち上がれるほど軽い。心配そうに見送る校長達に挨拶をし、階段を上る。

「ごめんね、大地。迷惑ばかりかけて」

「ばーか。迷惑なんて思ってたねえよ」

柔らかな猫毛や微かな吐息が首筋にあたってくすぐったい。意識するとむず痒くなってしまふから、あえて階段を上ることに集中する。規則正しい靴音だけが反射して響きあって、通常の学校とはどこか違和感を感じた。真砂も同じように感じたらしく、静かだね、と話しかけてきた。

「いつもは賑やかだもんね。ドタバタドタバタ、すごい音がいっぱいして」

「学校つてのは、ガキが集まる場所だからな。うるさいのが当たり前だ」

「うん……でも、すごく気持ちいい騒音なんだよね。安心するって
いうか」

三階に着き、俺は下がりがかけている真砂の体を背負い直した。

「ホスピスは高齢の人が多いし、とても静かな所だから。あれはあれで優しい空気があるんだけど……やっぱ、学校の方が好きかな」
「真砂……」

「ごめんね、しみりしちやって。そこまで気落ちしてるわけじゃないんだよ？ だけど、やっぱ……きつと、もう来ないだろうから」
咳き込む回数も増え、体の痛みを訴えることも多くなった。レコーディングが終わるまではもったにしても、発売までもつかどうかも疑わしい。それほど、真砂は日々衰弱しているのだ。琴岡さんから制作スタッフも仕事を急いでいる。そんな周囲の励ましに応えるかのように、真砂はいつも笑顔だ。痛み止めを打ちながら、まだ頑張れると笑ってみせる。以前までは安心できた笑顔も、今では痛々しく感じさせる以外の何者でもない。真波や梅田夫妻が影で涙を流していることも知っている。

「大地、僕はあとどれだけの時間を許されてるのかな」
囁きにも似た弱々しい声音で真砂が言う。

「あとどれだけ……こうして君といられるんだろっね」

「考えるな。お前はまだ、生きてる」

うん、と穏やかな返答があり、俺の首に回された腕に力が入った。
「……僕は、生きてる」

それからは会話も無く、大きな窓から漏れる陽だまりの中を黙々と歩いた。音楽室に着くと、小さな歓声が真砂から漏れる。ピアノの椅子に降りて欲しいという要望どおりにする。ピアノのセットを手伝ってやると、嬉しそうに弾き始めた。俺でも聞いたことのあるクラシック曲を聴きながら、ブレザーを脱ぎ捨て、ついでにネクタイも外してシャツのボタンを二、三個外す。近くにある椅子に座

ると、タイミングを計ったかのように演奏を止め、真砂が話しかけてきた。

「大地、僕の歌を聞いてくれる？」

「ああ、聴くよ」

ポロロ、と手慣らしに鳴らした後、真砂は本格的に演奏を始めた。透明感のある歌声がシンとした音楽室に心地よく響く。外国語で何を言っているのか分からないが、哀愁を秘めた優しい旋律だ。とても病人とは思えない、伸びやかでしなやかな歌。気がつけば目を閉じて、とつぷりと聴き入っていた。最後の音が完全に消えてから、俺は瞼を開く。聖母のような微笑が向けられていた。

「この曲はね、別れの歌なんだよ」

思わず絶句する俺に対し、真砂は相変わらずの表情だ。

「私は旅立たねばなりません。その旅先に何が待ち受けているのか分からず、不安や恐怖の念に押しつぶされそうになります。枕を涙で濡らすことも一度や二度ではありません。それでもこれは運命です。行かねばなりません」

「真砂……」

「そんな弱い私の支えは友よ、あなたです。あなたのその優しさと光が、どれだけ私にとっての癒しと力になることか。過ぎて行った輝かしい日々は戻らないけれど、消えることもないでしょう」

「……………」

「友よ、私はもう行かねばなりません。あなたとの思い出を鞆に詰め込んで。……あなたもまた、前を向いて歩いてください。あなたはあるままのまま、私は私のままに。歩く道は違えども、想う心は重なり合えるでしょうから。……そういう歌詞だよ」

ピアノ椅子から、真砂が立ち上がった。おぼつかない足取りで、一歩一歩踏み出しながらこちらへ来る。腕を差し伸ばすと、そこへ掴まった瞬間に真砂は座りこんだ。体を支えようとした手を逆に掴まれる。

「大地、僕はもう怖くないよ。君がたくさん、力をくれた。だから、

君も恐れなくて。僕が逝ったあとも、そうやって優しい笑顔の大地でいて。ホスピスの教会の時みたいに泣かないでね」

「泣かないって約束は出来ない」

真砂は、もう、と苦笑して小指を差し出してきた。簡単に折れてしまいそうに細い指だ。

「じゃあ、すぐに立ち直るって約束して。泣いても、ちゃんとすぐに元気になるって。いつまでもメソメソしない、って。……でも、僕のことを覚えているって。約束、して？」

俺はそつと小指を絡めた。真砂が安心するように、強く。ゆーびきった、と笑っているこの瞬間の真砂も、幼い頃から見えてきた数々の真砂も、忘れないと己自身にも誓いをたてた。

9：見え始めた向こう側

真砂が学校に籍がなくなっただけから、クラスメイトや小野寺は彼のために動いてくれていた。クラスメイトは、野崎を中心とした女子達の色鮮やかな千羽鶴を、男子が手紙や写真などを組み込んだアルバムを作っている。放課後になれば、皆それぞれが塾や予備校に行かなくてはならない。ささやかな休み時間の中で作業を進めている。小野寺は相変わらず真砂を応援するサイトの管理と運営を続けている。今では毎日すごい数のアクセス数があり、応援メッセージも毎日書きこまれていくようだ。それを毎日プリントアウトして、俺に渡してくれる。彼自身も受験の追い込みで忙しい時期にも関わらず、一日とて忘れたことはなかった。

レコーディングも終わり、後は制作スタッフの頑張りにかかっている。真砂が生きているうちに間に合うようにと、発売はクリスマス・イブの予定で、あと一週間をきっていた。

そうして周りの支えがあっても真砂の体調は悪化するばかりで、ベッドから出る回数は格段に減っていた。今日も青白い顔で痛みを耐え続けている。さっきまでは咳も酷かったが、それは何とか治まった。ただ、痛み止めがなかなか効かないのか、眠れずにいる。ここ最近、夜も寝つきが悪いようだから眠っておいてほしいのだが……。

「眠れそうにないか？」

静かに問いかけると、微かな頷きが返ってきた。睫を震わせて申し訳なさそうな顔をするから、気にするなと笑いかける。すると、真砂もほっとしたように弱々しく微笑みをみせる。もう長くはないだろう、そう感じさせる笑顔が胸をチクリと痛ませた。

「すごい雪だな……外も真っ白で、つままないだろ」

「そんなこと、ないよ……。白、くて……。綺麗」

ぼんやりと窓の外を見つめる視線に、以前は確かに宿っていた生

の光がない。ひたすらに儂くて、すぐに消えてしまいそうだ。初めてここを訪れたときの初雪を思い出した。茜空の中、舞い落ちては融けていった儂い粉雪。今の真砂は、まさにそのような雰囲気だった。

「あつたかい飲み物でも持ってくるか？体が温まれば、眠れるかもしれない」

「……うん。ここに、いて」

か細い腕が伸ばされて、そっと手首を握られた。色素の薄い瞳が茫然と見つめてくる。

「ねえ、……キス、して」

は？と問い返すことも出来ず、目を逸らすことも叶わない。まごまごしている俺を見て、真砂はふっと笑ってみせた。

「嘘……冗談だよ。言ったでしょ、こっちも願ひ下げだ、って」

ああ、「おまじない」のことだったのか。今でも効力があるのかは分からない。だが……。俺は真砂の顔の両脇に手をついた。ゆっくりと身を屈めると、真砂が焦った顔で逃れようとする。それに構わず、俺は口づけた。……真砂の柔らかい額に。

「俺をからかったりするからだ。ばーか」

「あ……」

驚いたように目を見開かせた後、安心したように息をつき、真砂は笑みを浮かべた。びっくりしたせいかな、肩に入っていた余計な力が抜けたようだ。

「……ありがとう」

「おまじない、効くといいな？」

「うん……きつと、効く」

事実、真砂は五分と経たずに安らかな寝息をたてていた。眠ったら眠ったで、またこちらは不安になる。布団を掛け直してやりながら、ちゃんと目を覚ましてくれと願わずにはいられなかった。

10：刹那の祝杯

「『神様の子供』の発売を祝して！」

琴岡さんの掛け声に、皆が杯をかがげながら「乾杯！」と叫ぶ。ホスピスのレクリエーションルームにて、真砂のCD発売祝いとクリスマスをかねて、身内だけのささやかなパーティが開かれていた。制作スタッフと、真砂の家族と俺の他に野崎と小野寺も招かれた。野崎は真砂と楽しそうに話している。もう、真砂の死への戸惑いは完全に断ち切ったようだ。壁に寄りかかってコーラを飲む小野寺に近づくと、向こうから話しかけてきた。

「良かったな。梅田も一緒にこの日を迎えることが出来て」

「ああ。……ありがとう、小野寺」

「ん？俺は何にもしてないぜ」
「してるさ、いっぱい。琴岡さんに聞いたよ。CDの通信販売を、小野寺のサイトで受け付けてるんだってな。……受験に響かないのか？」

「へーきへーき。お前に『最低限の生活水準は維持するべきだ』って説教した手前、勉強もおろそかに出来ねえからな。ちゃんとやってるから心配すんな。梅田にもそう言っとけ」

小野寺はすごい。学校と家庭教師、自主勉強だけで相当の時間を費やしているにも関わらず、さらに真砂のためにも時間を割いてくれるのだから。その気持ちを素直に伝えようと、小野寺は照れたようにコーラを一気飲みした。拳句、むせている。呆れながらも背中を叩いてやる。すると、なんだその目は、と文句を言ってきた。

「大体な、俺よかお前の方がよっぽど凄えよ。親友だからって、お前ほど献身的になんかなねえから、普通は」

「俺なんて……特別にすごいことなんかしてない。ただ、側にいただけで」

「その『側にいる』ってのは、けっこう気力があるんだぜ。日に日

に弱っていくのを側で見守るなんて、俺には耐えられない。……でも、ただ側にいてもらえるのってな、梅田にしてみれば一番嬉しいことのはずだぜ」

そこで会話が途切れ、互いに何となく黙り込んだままだいる。会場には、真砂のCDがBGMとして流れている。聖夜にふさわしい、清らかなメロディばかりだ。

「なんで、『神様の子供』なんだろうな」

「え？」

「CDのタイトル。そんな曲名、ねえだろ」

「ああ……それは、真砂が神様の子供だからさ」

真砂が作る歌は讚美歌のようなものが多い。彼自身も信心深いクリスチャンであるところから、琴岡さんがCDタイトルを決めたようだ。

「僕だけじゃない。……みんな、神様の子供だよ」

いつの間にか真砂が後ろに来ていた。今では一人で器用に車椅子を動かせるのだ。今日も祝いの席なので起きてきているが、体調も顔色もひどい。それでも笑顔が絶やされることはなかった。

「みんなが神様の子供なんだから、世界中が仲良くなればいって、そういう僕の願いも込められてるタイトルなんだ」

「そっか……。しかし、梅田。お前よく頑張ったよ」

「周りの人の支えのおかげだよ。小野寺くんも、本当にありがとう」
深々と頭を下げる真砂。小野寺はコーラを一気飲みしようにも、

先ほどの中身が空になってしまったため、気にするな、と慚然と呟いただけだった。

「ねえ、大地。琴岡さんやホスピススタッフの許可も出たんだけど、チャペルにお祈りに行きたいんだ。でも、車椅子だと雪にとられて上手く進めなくて……」

「ああ、いいよ。俺がおぶってやる」

「ごめんね、と申し訳なさそうに言う真砂を背負い、小野寺に真砂の背に膝掛け用の毛布をかけてもらう。本当は顔色が良くないし、

体調も良くないみたいだから外には出したくない。しかし、ホスピスは利用者の意志を尊重する場であるし、スタッフの許可も出たのなら大丈夫だろうと納得した。すぐ戻るから、と小野寺に残して会場を後にした。

外ではとつぷりと夜の世界が広がり、厚く積もった雪が銀色に輝いている。さすがに十二月の夜にもなれば刺すような冷気が漂っていて、吐く息も真つ白い。

「真砂、寒くないか？」

「平気。……大地って、子供体温なんだね。……くつついてると、あつたかい」

それからは言葉を交わすこともなく、チャペルに着いた。しんと静まった空気の中、祭壇の前で真砂を降ろした際、彼の息が不自然に乱れているのに気がついた。深くせえ言っているのではない。むしろ、呼吸量が極端に少ないのだ。鼓動を聞いてみると、それはひどく弱々しく、聞こえるか聞こえないかというレベルのものだった。

「おい、真砂……！」

「へい、き……」

「平気なもんか！ここで待ってるよ、今スタッフを……」

走り出そうとする俺の腕を、真砂は掴む。その力が思いのほか強く、俺は立ちすくんだ。真砂はケホンと一つ咳をして、哀しそうに微笑んだ。

「無理……もう、間に合わないよ」

「そんな、どうして……」

「十日くらい前かな……、もう、もたないって……宣告、されてた。一週間、もつか分かんない、って。だから、……もう、いい」
引かれるまま、俺は真砂の隣に腰を下ろした。そんな俺にもたれるようにして、苦しそうに心臓のあたりを押さえる姿に、駆け出して医者連れて来たい気持ち膨れ上がる。しかし、しっかりと俺の手を握る真砂の手を振り払うことなど、出来なかった。

「大地……あり、がとう。本当に……君が、君がどれだけ……僕の

支えだつたか。救われ……たか、君は……知らない、でしょ？」

「いいよ。無理して喋るな」

「い、から……聞いて。君、だけじゃなくて……みんな、にも。ありがとう、って……僕が、たくさん、ありがと……って、言つてた、って」

「そんなん……自分で、言えよ」

分かつてる。もう息絶えようとしている真砂が、俺に言葉を託しているのだと。頭では理解していても、心では全力で拒んでいた。そんな俺を切なげに見上げながら、真砂は微かな声で、呟いた。

「……おまじない、して？」

「……………っ」

「僕が、安心して眠れるように」

「出来るかよ！寝るんじゃねえよっ」

「けほっ……ふふ、変、なの。……いっつも、早く寝ろって、言つてた……くせに」

いつの話をしてるんだ。すっかりしろ、とかける声も空しく、琥珀色の瞳が焦点を失っていく。俺の腕の中に倒れ込みながら、それでも真砂は口元に笑みを浮かべた。

「ね……笑つ、て。……泣いちゃ、やだ」

そう言われても、滲んでいく視界はどうしようもない。力なく首を振る俺に、真砂も首を振る。

「やだ。……ちゃんと、見て。覚え、てて……最期、まで」

ちゃんと看取つてほしい、そういうことなのだろう。真砂の最後の……最期の願いなのだ。叶えなくては。ここにいるのは、俺だけののだから。ちゃんと、俺が見届けなくてはいけない。袖口で乱暴に目をこすり、新たな涙が浮かんでこないように笑顔を作った。きつと、相当無理している、引きつったものだろう。それでも満足そうに、真砂は虚ろな眼差しながらも微笑む。

「大地……僕、しあわせ。毎日……幸せだった」

「ああ」

「楽しかったことも……苦しかったことも、笑顔も涙も、全部あわせて……幸せ、なんだね」

「……ああ」

真砂の潤んだ瞳が、キラリ、と一瞬輝いた。その瞬間、ああ逝ってしまふのだと感じた。焦点の合わない瞳は俺を通り越して、遠くの空を見ている。しかし、咳き込みながらも真砂は笑顔を崩さない。俺とは違い、心からの笑顔を。

「大地……さよなら」

「真砂っ……」

「また、会おう……ね」

静かに閉じられた瞼。しばらく待ってみたが、それが再び開かれることは無かった。そっと、真砂の額に口付ける。まだ微かに残るぬくもりに、こらえていた涙がこみあげた。

「さよなら、真砂」

掠れた声で発した己の言葉が引き金に、俺はみっともなく声をあげて泣いた。どんどん冷えゆく真砂の亡骸に縋りつきながら、いつまでも。途中から人の気配が増えていったのにも気づかず、月光だけが包み込むチャペルで、朝がくるまでずっと泣き続けた。

真砂、お前は呆れて笑うかもしれないな。でも、俺は悲しい。今だけは、好きなだけ泣かせてくれ。約束した通り、ちゃんと立ち直って、笑ってみせるから。

12：春の陽に君がいる

融け残る雪の合間から新芽が顔を出す季節。ようやく陽射しも風も、暖かくなった。海が見える小高い丘には、ずらりと墓石が並んでいる。二つの筒と花束を手に、ブレザーに花のバッジをつけたまま、俺はブラブラと歩いていった。まだ苔ひとつついていない、真っ白くて十字の形をした墓石の前でしゃがみこんだ。

「よ。相変わらず、いい場所で眠ってるな、お前」

話しかけたあと、短く黙祷する。そして、乱暴に花束を置く。

「これ、声楽部の後輩たちから、お前に。……お前、黄色好きだったよな。後輩、覚えてくれたんだろーな……黄色いブーケだ」

墓石に背中を預けて座り、気持ちよく広がる風景を眺める。他の参拝客がいたら怒られそうだが、幸い、他に誰もいない。こうしている、真砂が側にいる気がして、わけもなく安心する。筒の一方から、卒業証書を出して広げた。そこには、真砂の名が刻まれている。

「退学届け出してたのにな、特別に校長がくれんたんだぜ。ちゃんと礼言っておけよ」

吹き抜ける風の中に、真砂の笑い声が聞こえた気がした。自然と口元をゆるませながら、俺は鞆からウオークマンを取り出した。中に入れているCDは、もちろん真砂の『神様の子供』だ。売れ行きは好調で、琴岡さんの会社の知名度も飛躍的にあがったという。売り上げは真砂の希望通り、琴岡さんの会社運営資金とホスピスの運営資金になっている。無事に国立大学に受かった小野寺は、今でもネットを通じて真砂のことを広め、何故か梅田真砂ファンクラブの会長にされているらしい。ふざけんよ、と言いながらも本人はまんざらでもない顔をしているから、いいんだろう。

俺も週末に予定が無い時には、欠かさずここに来ている。こうして墓石にもたれかかりながら、真砂の歌を聴いていると心が落ち着

き、靄が晴れていく。どこまでも碧い海と、青い空の境目を見ながらこうしているのが、今の俺の一番のリラックス方法だ。

耳元で流れる真砂のメロディ。琴岡さんに訳詞をもらい、真砂がどんな内容を歌っているのか、今では分かる。どの歌も、世界の平和や希望を歌ったものばかりで、まさに神様の子供の歌に思える。

今頃、真砂は天国で神の子として生きているんだろう。あたたかな春の陽気が真砂の眼差しに感じる。青空の先の陽を仰いで、俺は満面の笑みを浮かべた。

「また次も、親友として生まれたいよな」

そうだね、と言うように吹き抜けていく風は、アイツそっくりの日向の匂いがした。

12：春の陽に君がいる（後書き）

ここまで読んでくださり、有難う御座いました。

拙い部分も多々ありますが、少しでも何か感じていただけたら幸いです。

決して幸せではありませんが、不幸な物語でもないと私は思っております。

率直な評価や感想など、お待ちしております。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6289a/>

神様の子供

2009年7月2日03時56分発行